

アジアを 読む

14

シンガポール首相交代 —華人国家と 「中国ファミリー」の狭間

シンガポールの首相が交代した。ゴー・チョクトン前首相からリー・クアンユー上級相（初代首相）の長男、リー・シェンロン氏（前副首相）へとバトンが移った。シェンロン氏は国防、通産、財務などの主管大臣を歴任、早くから父親の後継者と目されていた。

建国を指導したリー・クアンユー氏の政治哲学は「強い政府」だった。かつて地元報道団体が同氏を招いて講演会を開いたことがある。タイトルは「リー・クアンユーなしでシンガポールは生き残れるか」。講演内容も刺激的だった。リー氏は夢を見いだせず移民を考えている女性が寄稿した新聞コラムを取り上げ、「シンガポールの若

者は国のもろさを知らない、何を考えているのか」と涙ぐみながら嘆いた。

「建国時の苦勞を知らない世代」と「政治エリート」との意識の差は今も大きいようだ。父親が築いた「強い政府」と「開かれた社会を望む声」をどう両立させるのか。「文明の衝突」で知られるサミュエル・ハンチントン氏が「李登輝氏が進めた台湾の民主化は続くが、シンガポールの清潔で効率的な政治はリー・クアンユー氏とともに消滅する」と語ったことがある。この予言を覆るのが新首相の課題だろう。既定路線の政権交代だったが、シェンロン氏が首相就任直前の7月に公式関係のない台湾を訪問したのは驚き

だった。「私的な訪問」とはいえ、予想通り中国政府の激しい反発を招いた。同氏は5月に中国を公式訪問したばかり。米国の台湾への武器売却問題などで台湾海峡の波風が強まっている中で、タイミングといい、「なぜ」という思いがしたものだ。

中台とシンガポールといえば、リー上級相の発言を思い出す。90年代後半の米テレビ局とのインタビューで、同上級相は李登輝台湾総統（当時）の依頼を受けて、中国の江沢民国家主席（同）に中台直行便の開設を提案したことを明らかにした。

中国、台湾、シンガポール共同で中台直行便運行会社をシンガポールに設立するのが提案内容だった。これに対し、江主席は「中台関係は」台湾、香港、マカオの中国ファミリーの問題」と拒絶。「シンガポールはファミリーではないといわんばかりの対応に、私の役割がなくなつたことを痛感した」と同上級相は当時を述懐している。

華人が大多数を占めるシンガポールは世界の華人社会の磁石役を演じてきた。華人実業家が一同に会する「世界華商大会」はシンガポール中華総商會が提唱し、91年からスタートした。

また、同総商會は華人企業との交流を仲立ちするサイト「世界華商網絡」を95年に立ち上げた。

政治面でもシンガポールは、93年に開かれた歴史的な「中台交流団体のトップ会談」の場を提供した。中国とインドネシアとの国交回復（90年）でもシンガポールが重要な役割を演じたとされている。華人社会でのシンガポールの存在は大きく、シンガポールもそれを自負してきた。

それだけに江主席の発言はリー上級相にとって相当のショックだったように、その後も「シンガポールは中国ファミリーではないと言われた」との発言を繰り返したものだ。

中台間で直接的な紛争が起きれば、東アジアへの影響は計り知れない。シンガポールでは台湾海峡に面する福建省にルーツを持つ華人が多い。貿易立国という経済構造と併せて荒波を受けるのは避けられない。シェンロン氏の政治リスクを覚悟したうえでの中台訪問は「華人ファミリーへの首相就任挨拶」と同時に、「真の中国ファミリー」として今後とも影響力を行使したい」という意志表示とも受け取れる。

（日経香港社 奥村幸広）